



志度高だより 一飛翔の窓

第117号
(H22.11.19)

「反骨精神」

バレーの世界大会の中継があって、日本対ブラジル戦を観た。オリンピック王者のブラジルが日本チーム相手に手こずっていた。数年前ならブラジルが相手と聞くだけで、勝負は見えていた。キューバ戦とか中国戦をとっても同じで、日本は嘸ませ犬同然というのが定説だった。

ところが最近の女子ナショナルチームといえば、強化がうまくいっているのか、世界の強豪となんら引けをとらない。打点とブロックの高さについては致し方ないとしても、昔からお家芸だったレシーブは文句のつけようがないし、筋力的にも力負けしなくなった。それともう一つ変わったなと思うのは選手の雰囲気だ。随分と垢抜けしている。と言うか、お洒落だ。テレビで放映されるので、「見られること」を意識しているのは間違いない。

バレーの話となると、東京オリンピックで金メダルを取った『東洋の魔女』を抜きにしては語れない。日紡貝塚の選手を主体として、宿敵ソ連をストレートで撃破したときの感動は今も鮮やかだ。

私はある雑誌で当時の日紡貝塚の練習ぶりについて読んだ。インタビューに答えたのは、コーチ兼主将だった河西昌枝さんだった。日紡貝塚を率いるのは鬼監督と呼ばれた大松博文氏。私が衝撃を受けたのは、想像を絶するその練習ぶりだった。部発足当時は負けてばかりいた。そこで負けては練習、負けては練習、その繰り返しだったという。ところが猛練習の甲斐あって、発足1年あまりで全日本9人制バレーボール実業女子選手権大会で初優勝。それに続いて全日本バレーボール女子9人制総合選手権、国民体育大会と優勝を重ね、名実共に日本のバレーボール界の旗手的存在となった。この後も国内の名だたる大会に優勝し、もう国内で取るべきタイトルがなくなった。

そこで目を向けたのが海外。当時、世界は6人制バレーが主流。大松監督は迷ったが、思い切って9人制から6人制に切り変えた。当然のことながら練習はさらに過酷になった。ぼろ切れのような毎日だった。練習中に何度も気を失った。それでも練習は続いた。そのあまりの壮絶さに選手は鬼監督を腹の底から憎んだ。夜逃げも考えた。それに練習以外の規律も厳しかった。外出一つ取っても、必ず集団行動で大松監督が付いて行ったという。彼女たちは地獄のような練習に耐え、『東洋の魔女』になった。結婚適齢期でありながら「私たちは女として見られていなかった」との河西さんの言葉が印象的だった。もう一つ印象に残る言葉があった。確か次のような内容だった。

「今振り返ると、鬼監督大松博文は私たちにとって、兄であり、恋人であり、父親だった」

それにしても凄い言葉だ。選手と監督の間に「人生を賭けてもいいという何か」がなかったら、選手は猛練習に耐えられなかっただろうし、東洋の魔女という伝説的呼称も生まれなかっただろう。それともう一つ、当時はそういう時代だったのだろう。つまり、人間は耐えて当たり前という時代。堪え忍ぶということが、日本人の美德とされていた時代があったのだ。

ところが、時代は移り人間の気質も変わった。例えばアメリカ。最近、アメリカでエリートと呼ばれる人たち、つまり医者、弁護士、学者という人たちの圧倒的多数を占めるのは、難民としてやって来たアジア系の人々である。暖衣飽食のアメリカ人は、いつしか気概（バックボーン）を失ってしまったというのである。

よく考えると、日本も同じではないか。発展途上国から来た留学生が勤勉に努力し優秀な成績を残している。消費社会にどっぷり浸かって不自由感のない日本人はどうか。たどる道はおのずと分かる。現在、大手企業では海外駐在員のなり手がなくなることが悩みの種であるという。一昔前なら、海外駐在員と聞くだけで目の色が変わったというのに、今の若者は無理してしんどい思いをするくらいなら日本にいたほうが良い、ということらしい。なんと軟弱。聞くに耐えない。ナマコ人間か、はたまたこんにやく人間か。

ある先生と校門に立っていた。その日は雨。やけに自転車通学者が少ないと思ったら、親が車で送ってくるのだ。これまたなんと軟弱。言う言葉がない。雨ごときでこの有り様だ。雨の中、元気に走り回るのは猿とイノシシだけか。

こういう状況だから、今のテレビ映りのいいバレーボール選手より野暮ったい黒のフリーマをはいた東洋の魔女に惹かれるのだ。回転レシーブも変化球サーブも凄かったが、賞賛するのは彼女たちの反骨精神だ。ひたむきさだ。試練に耐え、ひたむきに努力する姿は美しくさえあった。

